

# 在日ブラジル人の移住過程と課題

—トランスナショナルな社会政策の必要性について—



## ウラノ・エジソン・ヨシアキ

東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター センターフェロー  
一橋大学大学院社会学研究科・フェアレイパー研究教育センター  
シニア・リサーチフェロー

### ◇ 地域に必要なグローバルな視点

私は、この研究班に途中から加わった。そのときには、この協働実践研究は動き始めており、既に長野県上田市が研究対象に決まっていた。在日のブラジル人の定着率が高く、自治体の取り組みも先進的であり、事例としてふさわしいと判断されたのだろう。

実際、現地に数回足を運び、外国人児童をサポートするために設けられた外国人児童・生徒を支援するクラス「虹のかけはし」で、担当のバイリンガルの先生が熱心な指導を行っている現場を視察し、また、在住の日系ブラジル人にインタビューすると、地域の住みやすさ、自治体の対応のよさについての話を何回も聞くことができた。さらに、行政サイドも外国籍市民の生活サポートにいかん力を入れているかは、市が市民課に雇用している在日外国人相談員の多さからもうかがえた。

その一方で、ブラジル人を雇用していた電子機器大手が工場を海外に移転したため、市内在住のブラジル人人口が一举に100人単位で減少したり、中国人労働者の増加などの実態を垣間見て、グローバルな労働市場の再編によって構造化された、不安定で流動的な雇用状況に日系ブラジル人がおかれている現状も知ることができた。こうした影響で、「虹のかけはし」第2号としてつくられた外国人児童・生徒のためのクラスには、少なくとも10人の児童・生徒の参加が予想されていたが、一ケタしか集まらず、自治体自らがコントロールできない動きへの

対応に手を焼いている様子もうかがえた。

日本でのラテンアメリカ人労働者の導入が始まってから早くも20年以上がたっている。それは、最初に日本人移住者のUターン、二重国籍保持者の出稼ぎから始まった。そして、日系3世の日本への入国・生活を可能にした1990年6月の出入国管理法改正。その改正は、積極的な移民政策を意味しなかった。しかし、二国間に潜在的に存在した移住過程の諸条件が法改正により一気に移動過程を形成した。

アウトソーシング市場の拡大、生産のフレキシビリティを追求する企業は、労働力確保の手段においてもフレキシブルに多様化している。2003年の労働者派遣法改正は、生産現場への労働者派遣を解禁することで「偽装請負」を阻止し、アウトソーシング市場の是正を目指したはずだったが、流動化が一段と進んでいる。請負業者の派遣事業への参入、派遣業者の請負業への参入など、新たな競争過程を生み出しつつある。不安定雇用の拡大と社会保障の強化を両立させることは、現制度では不可能であるし、パラドックスでもある。不安定雇用に揺さぶられる家庭が、社会保険、国民健康保険に継続的に加入することは至難の業である。日本における日系外国人の教育、社会保障、労働市場での位置付けを考えると次世代も含めて日本社会の底辺に固定化されるといった可能性に直面している。

さらにこうした動きに加えて、中国籍外国人の増加もひとつの現象としてうかがえる。安価な労働力を求めて、研修生・技能実習生をブラジル人に代替する労働力としての導入が日本のいくつかの地域で起きており、上田市でも起きている可能性が数字として表れている（資料p.113、114、116参照）。

日本の一地方都市である上田市を通じて、グローバルな「ひと」「もの」「かね」のめまぐるしい移動・入れ替わりが確認できるのである。地域としては、こうした動きをグローバル経済の発展と企業の生き残り戦略の必然的な動きとしてのみ込まざるを得ないのだろうか。これは、外国人労働者における特別な、限定された現象ではなく、世界規模の労働市場の一環でこうした実態があり、市場全体に賃金水準や雇用状況を揺さぶる「余波」としても読み取れるのである。

#### ◇ 現場の調査で感じたこと

協働実践研究とは、何かからの取り組みを進めるために協働で行うものであるが、実態を正確に踏まえてこそ可能になるものだと私はこの研究をイメージしている。実態を正確に把握する作業が大前提として存在すると私は考えている。研究を行う手順や、フィールドワークにおける基本的な心得など、細かな作業を怠っ

てしまうと、「仮説」や「前提」がすでに設定された「結論」に導くための手段にしかすぎない可能性も出てくる。導きたい「結論」が分かっているのであれば、実態調査といったさまざまなリソース（資金・人材など）を必要とする作業を行う必要もないであろうし、これがまた実態の把握につながらない場合、実践そのものにも有効性を発揮しないであろう。「多文化」が「協働実践研究」の前につくと、真の多様性への配慮、多国籍を保持する外国籍市民が対等な立場にあり、雇用面でも日本人と同じ権利を持ち、労働組合に参加する権利を認識し、進めるといった考えを共有することが前提であると考え。

私は、研究班の一員として3度上田市を訪問した。以下その体験を踏まえて話を進める。特にベースとなる資料が、ヒアリングした15組の日系ブラジル人家族のうち、逐語録作成済みの6組のブラジル人家族へのインタビューであることをあらかじめお断りしておく。

### 【定住化志向と不透明感】

全体的にそのインタビューから見えてくるブラジル人たちの姿は、定住志向が強まっている一方で、ホスト社会での展望が不透明であることである。例えば、これまでインタビューした家族の中でも、最も定住志向が強いオノデラさん（仮名）の事例を通して考えてみよう。40代後半のオノデラさんは、長女、長男と妻の4人家族で、上田市で生活している。娘は高校に行き、息子は中学校に通っている。数年前から、オノデラさんは社会保険に加入できるようにと、以前勤務していた請負業者とは異なる別の請負業者の会社に転職した。間接雇用でありながらも、オノデラさんは旋盤工として技能を身につけているので、比較的安定した雇用状況にある。

### 【親たちの計画、子どもたちの将来と心境】

子どもたちの雰囲気は日本人の子どもと変わらないが、話が進む中で、どこか、彼・彼女たちはブラジルへの思いを残していることが伝わってくる。高校を卒業し、ブラジルに行ってポルトガル語を勉強したいと語った娘のチカコさん（仮名）。彼女の場合、日本の大学に進学し、日本で生活し続けることが自然の流れであり、帰化することも視野にある。半面、ブラジル国籍を捨てることには違和感を覚える。せっかく自分が持っている他の人とは異なった歴史とアイデンティティーを失うのがイヤだと、複雑な心境を語ってくれた。

「何か、普通の純ブラジル人だったり、純日本人じゃなくて、日系ブラジル人って、ビミョーな感じだから、日本ともブラジルともかかわりを持てるから、いろいろ面白いことできるから、面白いから、それをなくしたくない」

オノデラさんは、息子が日本で公務員になるかもしれないと、帰化について考え始めている。しかし、年金が受けられるのか受けられないのか、ある年齢に達したとき、両親はブラジルに帰国して老後を母国で過ごしたほうがよいのか、さまざまな可能性を検討している。

### 【高校進学に直面する子どもたち】

オノデラさんの子どもたちのように、中学校、高校といった難関を通過し、日本社会で上を目指す可能性が残されている子どもたちもいれば、工場で親と同様に工員として働く道を歩み始めている子どもたちと話をすることもできた。親の教育への関心が足りないことが原因であると、「アカデミック」な視点を持つはずの立場の人々が「道徳主義」でこうしたケースを「分析」することもしばしばあるが、今回の面接でうかがえたことは、子ども自身が自分の高校進学についての可能性を現実的に判断している事実であった。

自分の語学力などを自覚し、「面接で校長先生とうまく話せないだろうし、無理だと思う」と語った少年。また、家庭の事情を考えると、早く自分が働き手になり、家計を支えることがベストだと感じ、進学断念を考えている子もいる。教育制度の「敗者」としてではなく、頼もしい子どもとして私の目には映った。中学校までは「自動的」に進むことができる日本の学校では、高校への進学か、それとも就職かと考えなければならない時期にこうした現実が待ち受けている。しかし、これから外国人児童・生徒により多くの可能性を与えるためには、学年が進むごとに学力が確実に身につけているかどうかのチェックとサポート機能の構築が必要だと考えた。

### ◇ ローカルな取り組みには限界

日系ラテンアメリカ人の日本での生活サポートに対し、各地域のボランティア団体、地方自治体などが、試行錯誤を重ねて対応してきている。今ある外国籍市民に対応した支援体制や公的サービスはこうした努力の蓄積によるものである。しかし、ローカルな取り組みには限界がある。今回調べた上田市の取り組みにおいても、同じことがいえるだろう。外国籍市民には、できるだけ地域で普通の生活ができるように地域レベルで考え、新たな取り組みへの挑戦でもある「虹のかけはし」のような、外国人児童・生徒の日本への教育システムへの円滑なインテグレーションのためのクラスは、これからも体制として充実していくことが望ましいと私は考える。調査の中で、「虹のかけはし」のために転校した家族もいたほどだった。

移民の受け入れ体制を積極的に行っている国では、「虹のかけはし」と同じ精神を持つ取り組みが、特別な学校として設立され、そこでは数カ月から1年間外国人児童・生徒が、母語の話せるバイリンガル教師のもとでホスト社会の言語を学び、新しい国の教育システムへの段階的なインテグレーションが計画されている。これは国家レベルで計画され、実施されるからこそ可能なのである。

#### ◇ 国家レベルの対応策を！

時には、教育システムの財政難と外国人児童・生徒受け入れにまつわるコストの問題が取り上げられ、「学校に外国人児童・生徒が増えると、その学校の教育水準が低下するため、日本人保護者が子どもを転校させてしまう問題が生じている」といった意見や実態が報告される。表面的に見ると、後から入ってきた外国人児童・生徒が学校の学力低下問題の原因として目に映ってしまうかもしれない。移住者が自分の意思と責任で半球を渡って来日しているのは確かである。しかし、グローバルな社会経済動態の強いうねりに反応し、動かされている側面も忘れてはならない。その動きに地域で「場当たりの」な対応を余儀なくされている学校をサポートするための、上記で述べたような、国レベルでの受け入れ体制の不在がこうした教育水準の低下の最も大きな要因ではないのだろうか。

これは、外国人児童・生徒の問題ではなく、実質的に多様化が進む教育の現場に、どこまで異なった文化的背景を持つ人々を受け入れる準備があるのか、といった、教育システム全体と「教育とは何か」という根源的な問いかけにも関係しているものである。

どの国でも外国人労働者を導入する際、文化的多様性に富む国にしたいから移住者へ門戸を開くといった夢のような話は見られないであろう。むしろ、企業中心に労働力不足を補うための政策として実施されることがほとんどである。日本でも日系外国人の入国許可においても同様である。しかし、外国人が入国し、生活できるようにと与えられるビザの制定は、入国政策であり、受け入れ政策であるとはいえない。このあいまいな制度の中で、仲介業者のシステムが構築され、請負業者・派遣業者を通じて大半のラテンアメリカ人が不安定な雇用状態に置かれている。

“Não basta só trazer o brasileiro e jogar ele dentro da fábrica para trabalhar”（単にブラジル人を連れてきて工場に放り投げて働かせるのではだめだ）

これは、上田市以外の地域でインタビューに応じてくれたあるブラジル人の言葉だ。これからの定住化を考える際、社会全体の公益に配慮した国家間レベルで

「受け入れる」といった発想が必要だ。

### ◇ 「社会コスト」をどう「投資」に変えていくか

ラテンアメリカ人移住者がすでに約40万人日本で生活している現状で、移民政策の不在が続いている。最前線で諸問題を理解し、外国籍市民の生活に対応を図る自治体は、外国人を市民として認識している。半面、国からは、移住者は移民として認められていないまま地域で生活している。移住者が移民として「正式」に認められると、受け入れ体制の充実が義務として発生するはずである。こうした「概念的」な是正の必要性は必至となる。

「移民受け入れ」となると、教育・社会保障を含む体制づくりが多大な社会コストを生み出すといった見方が世間に存在するが、社会コストといった表現を問いただす作業が重要である。見える社会コストは、財政ポートフォリオに数字として示される、比較的わかりやすいものである。見えない社会コストは、例えば、外国人児童・生徒が日本の学校に行き、言葉ひとつ分からずクラスで一日を過ごし、そのストレスによる社会コスト。児童・生徒が毎日、夜遅くまで、親の残業のために待ち続けなければならないときの寂しさ、家庭での触れ合いが希薄になっていくコスト。社会保険への加入を断られ、落ち着いて働けない労働者。これらは、ストレスや挫折のため、数字として見えてこない本人負担分である。1年、3年、10年後……目に見える形で社会コストとして現れてくるであろうが、そのときは遅いであろう。

「虹のかけはし」のような取り組みには、今後の取り組みにおいて大きなヒントがあるように思える。それは、「社会コスト」を「投資」に変えていることである。人材への投資が希薄になりつつある企業にもヒントになるであろう。

越境的な「世界」で生活する移住者の現状は、教育制度・雇用・社会保障などの分野で新たな枠組みの形成を求めている。受け入れ体制の構築、二国間協定の締結、年金や社会保険の脱退一時金制度の拡大、カリキュラムや成績評価に関する情報交換などは、越境的な要素を制度に反映するであろう。上田市における在日外国人のための取り組みは、ローカルなイニシアチブである半面、越境的な動態、トランスナショナルな移住過程への対応である事実を認識することが重要である。その意味では、自治体レベルにおいても、グローバルな社会で新たな「市民権」を保障しうる、広範なバックアップがあつての政策枠組みの発展は、今後の重要な課題である。